

へき地教育を担う大学サミット『へき地教育と教師教育』出席報告

理科教育 八田明夫

Report of attendance to the University summit for "Education in Remote place"

Hatta Akio

本フォーラムは、北海道教育大学の19年度特色GPとして、主催；北海道教育大学、後援；北海道へき地・複式教育連盟で、2007年12月1日に、札幌市センチュリーロイヤルホテルで開催された。筆者は各大学の取り組みとしての発表者として指名されたので、そのフォーラムについて報告する。

1 はじめに

開会行事で、本間謙二北海道大学長が、へき地・複式について多くの大学がサミットを開催する意義について述べられ歓迎の意を表された後、村田文江(北海道教育大学へき地教育研究センター長)は、本フォーラムの主旨について述べ、へき地教育は、小規模な学校の条件を活かして優れた教育実践を積み重ねてきたこと、地域に根ざした体験活動や個に応じた学習活動・生徒指導は、都市部においても共有すべき内容を含んでいることを紹介した。また、過疎地では学校の統廃合がへき地教育実践の継承を困難にし、地域の教育条件の低下をもたらし、地域社会全体の崩壊をまねいていることも述べられた。こうした現状に対し、地域を深く理解し学校の教育活動のみならず地域の諸活動を支えることのできる教師が求められていると述べ、へき地教育を担う教師は、へき地・小規模校教育の基礎知識・指導法を身につけている様に期待されている、と挨拶された。

このようにへき地教育で研究すべき課題は、学校内での教育のみならず、へき地小規模校のある地域の特性をも研究していかなければいけないことであることが示されフォーラムが開始された。

2 第1部 琉球・鹿児島・長崎・和歌山の各大学の取り組み

第1部は琉球、鹿児島、長崎、和歌山の各大学が実践している取り組みが紹介された。山口剛史(琉球大学)、八田明夫(鹿児島大学)、村田義幸(長崎大学)は、三大学連携研究の中で行っている研究や成果について報告した。

琉球大学は離島へき地教育について鹿児島大学・長崎大学と共に連携して研究し、19年度から教員養成段階における複式授業論を講義の中で取り入れて実践しており、長崎大学の複式授業の受講者に対して「ストップモーションによる演習的な講義」を実践し、三大学連携研究に参加している大学教員も参加して授業研究を行ったことなどを報告した。長崎大学は五島市で実施したフォーラムなど本取り組みを紹介した。

鹿児島大学は、鹿児島県が北海道に次いで複式学級のある小学校が多いこと、小学校総学級数に占める複式学級の割合は、北海道の10.8%に対して鹿児島のそれは、13.7%と最も高いこと、本連携研究の中で複式授業研究の幹事校として多くの離島における複式授業を観察・研究していること、「複式学級指導法」の授業は平成19年度から講義として教育課程に取り入れたが、III期(2年前期)からの受講としたため、平成20年か

らの実践となることなどを紹介した。

また、鹿児島県内の小学校について学級数と児童数の関係を調べ、図1に示すように5学級の学校には、30から60名の児童がおり、4学級では15～40名、3学級では5～30名、2学級では10数名以下、1学級では10名以下の児童がいることを示している。

学級数と児童数の関係から、5学級の小学校には1つの複式学級があり、児童数は各学級8名前後に近づいている。4学級の小学校は、2つの複式学級があり、1年と2年が単式である可能性が高く、児童数は各学年4名から8名程度になっている。そして、3学級の小学校は全学年複式学級であり、児童数は各学年4名以下になりつつあることを示している。

学級数と児童数

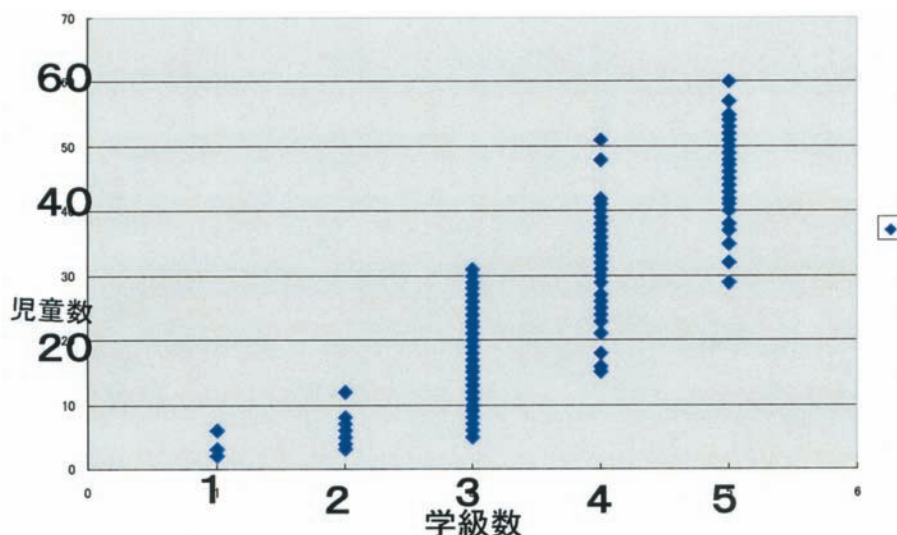


図1 学級数と児童数の関係

このデータは、現在6学級ある学校でも児童数が60名以下になった場合、いつ複式学級を編成しても良いような準備が必要であることを示している。

三大学は国立大学の法人化後、競争的原理が強調されているが、教育については予算縮小の中で同じような境遇の三大学がより協調的な研究を行い、成果を共有するという理念のもとに連携研究を開始している。それぞれの県が複式学級の増加にどのように対処し、教員養成をどのように変えていくかという課題を共同して解決策を考えているものである。

豊田充崇(和歌山大学)は「へき地・複式校での教育実習」を取り入れている和歌山大学の取り組みを紹介した。この体験の意義として、地域に生きる子どもたちをまるごと捉えることができ、地域の実情・要望を知り、子どもの生活空間となる地域の実態を知ることができ、学校と地域を結びつける力量を身につけることができるとしている。少人数学級の指導を通して子ども一人一人を捉える力が伸び、教師はどう向き合ったら良

いかということに対してじっくりと学び・考え・取り組むことができるとしている。また、少人数教育の中でこそ「個」を「孤」と捉えるのではなく、他の子どもとの関係の中で「個」を位置づけることが出来るようになることが大切だと報告した。

3 北海道の取り組み

II 部では北海道教育大学の取り組みと十勝管内・上川管内の小学校の実践が紹介された。川前あゆみ(北海道教育大学)は、北海道のへき地校の数と実態について解説し、北海道全体の 56%がへき地校であることを示し、北海道大学のへき地教育に対する取り組みを紹介した。北海道教育大学はへき地小規模校教育実践プログラム(特色 GP)を実践しており、体験した学生の「上の学年が下の学年の面倒を自然に見る小さな学校の良さを体験し、教師になる決意が更に強固になったこと」また、「複式クラスの教壇実習で、へき地教育の難しさ、個に応じた指導の大切さを、身をもって体験した」ことなどを紹介し、このプログラムを通して学生が自信をつけていることを示した。

北海道教育大学の特色 GP の内容は、へき地教育研究センターが中心となって、へき地校体験実習の運営を体系化し、複式学級の映像資料を制作し、学生の学習教材とすること、ワークショップで学生が体験発表し実習内容を検証すること、自治体・教育委員会・へき地教育連盟と連携を深めること、他大学・海外とのネットワークを形成すること、などを紹介した。

幸村敏晴(北海道教育大学教職スーパーバイザー)は、18 年度からの旭川校のへき地教育の取り組みを紹介した。同校では 1 年次にへき地教育論 I、へき地教育論 II を、2 年次にへき地教育指導論、基礎実習(小規模校観察実習)、へき地校体験実習 I を、4 年次にへき地校 II を実施している。18、19 年度に実施した段階で、学生のへき地・小規模校教育に対する関心が高くなってきていること、実習協力校の支援・指導のもとで学生は講義では得ることのできない貴重な体験をして良い影響を受けていることを報告した。

狩野信也(幕別町立途別小学校)は、十勝管内の教師力向上をめざした研修について紹介した。同管内で行われた教師力の向上策で特記すべきことは、「複式新任教員研修塾」、「教師力向上ワークショップ」である。北海道が 10 年前に大量採用した教員が 30 才近くになって同管内に赴任してきている。こうした教員は複式学級を初めて経験するため研修の機会が必要であり、この塾の存在が大きな役割を果たしているということである。複式新任教員研修塾の成果は、参加者が複式指導の進め方を理解できたこと、児童の自己解決力を育成する方法について考えることができ、解決のためのヒントの出し方を理解できたことをあげていた。

教師力向上ワークショップでは複式指導教員が若手教師の授業力を伸ばすように指導し授業公開に結びつけていた。このワークショップの成果としては研修者(複式担当教員)の複式授業構想力が伸長したこと、この公開授業を通してこどもの自己学習力が向上したこと、高学年の児童の向上(変容)が低学年の児童にも転移していることなどをあげていた。報告の資料の中で「子ども達のための間接指導」という言葉が光っていた。間接指導は「自学自習の学習方法」であり、単に教師が直接児童につけないために作り出される学習の時間なのではない。自学自習では、何を学び、何を習おうとするのか分か

るようにしなければいけない。自主的な学習ではどのような学びを進めていくのかを身に付けることが大切であろう。

北海道へき地・複式教育研究連盟事務局長である宮下敏(士別市立中士別小学校)は、北海道のへき地教育の現状について報告した。士別市は市内へき地校8校全ての複式学級へ教育実習生(北海道教育大学)を受け入れている。その成果として学生がへき地校の教師の仕事を理解し小規模・複式授業の実践方法を体験するだけでなく、児童の学習や生活への意欲が喚起され、学生との触れ合い・出会いと別れを通して心の豊かさを育成できたこと、そして教師にとっても士気が向上し研修意欲が向上したことがあげられた。

また、宮下はへき地教育の「三特性」へき地・小規模・複式形態を次のように分析した。へき地性は豊かな教育力(自然・人・文化・伝統)があり、その活用・活性化ができ、多様性を実感できる異年齢との交流体験・地域生活と密着した学びがあること。小規模であることは、個と小集団に視点を当てた教育ができ学力の向上が望めること、個を生かし伸ばす指導や具体的な学び方・学び合いの仕方を定着させることができること。複式授業では、間接指導時において自主的・主体的な学習力が育成されること、「教わる」と「自ら学ぶ」ことのバランスを通して自学自習の習慣が形成され、異学年間の学びを体験し、リーダー性を通じた学びがあることを示した。

最後に、幸村の発表資料「へき地教育と教師教育」の中からへき地教育論受講後学生の感想を紹介する。

「様々な学習指導の仕方を学び、ただ教えるといっても教師は色々考えて努力していると感じた。へき地についての学習はもちろんだが、この講義ではそれ以上に教師の在り方というこれから教員を目指す私達にとって一番大切なことを学んだのではないかと感じる。」

「もともと私はへき地出身であったのでとてもこの講義に興味がありました。その時は、児童の側で全く違和感なく授業に集中していました。先生も難なく授業をこなしていました。今回教師の側からへき地教育にアプローチして様々なことを学びました。へき地だから、少人数だから出来る指導、教師間・学校間・地域との連携、自学自習の大切さを学びました」

「最初のへき地校のイメージは田舎っぽい所にある学校だったのですが、受講回数が増すごとにへき地教育の特性とか、長所・短所が見えてきて真剣にへき地校のことを考えるようになりました。印象的なのは実際に実習に行った先輩の話聞いたことです。そこで、実際に児童たちと触れあってきた人しか分からないへき地校の良さや大変さ等を知ることができたためになりました。この講義で学んだことを自分のものとして受け止め身につけて頑張っていこうと思います。」

以上のように、教員養成の段階でへき地や複式授業について学び・体験実習をすることで、学生は教師になること、へき地で教師をやっていると思う気持ちを内発的に高めていることがわかる。鹿児島大学での1年生の学校環境観察実習の経験者が教師になる意欲を高め、学習意欲を高めていることに共通しており、体験的な学びの重要性を再認識できた。本フォーラムはへき地教育や複式授業の課題に答える内容の多いものであった。